様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５８７０３４２

研究課題名（和文）倭寇論の再構築

研究課題名（英文）Critical reconstruction of the knowledge on the Wokou, "Japanese Outrage" in the sixteenth century

研究代表者
山崎　岳（YAMAZAKI, Takeshi）

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：６０３７８８８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：16世紀中期の倭寇を題材に、主に中国側の文献を精査することで、地方官憲の中心となる総督胡宗憲と、王直や徐海を筆頭とする密貿易集団との接触、および彼らの関係を仲介する人々の「官」と「賊」に対する両属的なありかたを再検討した。こうした作業を通じて、当時の明朝官憲と「倭寇」と呼ばれる越境的な海賊・商人集団とが、経済的利害や治安などの問題を共有しながら相互に協力関係にあったことを解明し、中国社会と東アジア海域世界との接点をなす社会構造の一端を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the Wokou, “Japanese Outrage” in the sixteenth century, I made an intensive research on the Chinese sources, to review some persons of that time, who acted as intermediator between the authority and the rebels. Through this research, I illustrated the fact that the officials and the Wokou bandits were occasionally in close cooperation on some economic and security issues, and that this flexibility and instability of the oficial policy and the social structure of Ming China made it possible for the people in the coastal provinces to have clandestine connections with the East Asian maritime world despite of the prohibition.

研究分野：東洋史　中国明代史　東アジア海域史

キーワード：倭寇　明　中国　海域　国際関係　歴史　海賊　東アジア

１．研究開始当初の背景

東アジアの国際関係については、近年、海を越えたヒト・モノ・カネ・情報の往来が注目され、海域史と呼ばれる枠組みが広く認知されつつある。「倭寇」は前近代の日朝・日中間において外交関係とは次元を異にする民間で発生した国際関係として研究者の関心を集めてきた。しかし、従来の研究では、日中関係や交易システムなど、特定の事象に関心が集中する傾向が強かったため、「倭寇」を単に密貿易集団と解し、その平定と明朝の海禁緩和との間に安直に因果関係を想定する歴史記述も少なくない。実際には、「倭寇」という事象は、これらにとどまらない様々な要因が複雑に絡み合って起こっている。そうした歴史的文脈を掘り起こし、環東シナ海文化圏における社会変動という、より大きな次元で「倭寇」をとらえなおすことが今日求められている。

２．研究の目的

本研究は、「倭寇」の歴史的な要因と影響を、多様な社会的側面から分析し、これまで注目されてこなかった歴史的文脈の中に位置づけ直すことを目的とする。さらに、そうした作業を通じて、「倭寇」を環東シナ海文化圏における全般的社会変動という次元で捉え直し、関係諸国・諸地域が海を通じて共有してきた「場」としての歴史的社会像を探ることを目指す。時期的には、嘉靖倭寇のほか、14-15 世紀朝鮮の倭寇も検討対象に想定している。なお、具体的な主題としては以下の三点を挙げる。

(1) 官府の治安機構との関係

明代中国の治安機構と反政府的武装集団との間には、一定程度の人員の流動性が確認される。官軍と盗賊とは表裏一体の存在であった。このことを敷衍して、「倭寇」と官軍の協力関係、および人員流動のメカニズムを実証的に解明する。

(2) 漁業・漁民史との関係

中国史では、漁業・漁民史の意義は日本史におけるほどには注目されておらず、海を生活の場とする人々の民衆社会史をより大きな文脈に編み直すことは、少数の例外を除いて試みられてこなかった。こうした環境史的な視点は、中国沿海史に新たな相貌を与えるための有効な視座となると考えられる。本研究では、朝鮮・琉球・大越・日本をも視野に入れ、漁民の生活圏という観点から、同時に沿岸諸国・諸地域における社会変動の媒体でもある東シナ海の意義を再検討する。

(3) 江南の社会変動との関係

明代中期は江南デルタにおける税糧・徭役制度に対する改革が大幅に進められた時代だが、これと「倭寇」との関係に踏み込んだ議論はほとんどない。嘉靖期の「倭寇」問題と、大土地所有および税糧・徭役負担といった江南農村の社会問題とは必然的な関わりがある。「倭寇」を江南デルタで行われた税糧・徭役制度改革と結びつけ、江南農村の民衆反乱という文脈で読み解く。

以上三つの側面から、「倭寇」を中国史と海域史双方の接点として、また明末へと向かう中国社会の画期をなす転換点として、東アジア史上に再定置する。

３．研究の方法

研究は主に文献資料に依拠して行う。そのため、日本国内・中国・台湾・韓国・ポルトガル等の図書館において史料収集を行う。また、本研究を遂行するため、史料閲読のための基礎データとなる港湾・島嶼・海洋の一覧図を作成する。さらに、これに基づいて、日本国内・中国・韓国における関係地点の実地調査を行い、現地の郷土史家や地勢状況から、論文作成のための補助的な情報を収集する。

４．研究成果

本研究の成果は、研究目的に掲げた三点、およびその他の計四項目に分類される。これらを有機的に統合し、東アジア海域における「倭寇」についての総合的な歴史像を提示するには、今後の継続的な研究にかかっているが、現段階でも個々の課題については一定の成果があった。それぞれ研究目的欄の項目に対照させ、相当する事項を以下に列記する。ただし、現時点で刊行物として公表していないものについては、概容にとどめた。

(1) 官府の治安機構との関係

嘉靖倭寇と官府当局との提携関係を実証的に示すことができた。これは本研究が今回提示する主要な成果である。地方官憲の中心と密貿易集団との接触、および彼らの関係を仲介する人々の「官」と「賊」に対する両属的なありかたを再検討した。それによって、当時の明朝官憲と「倭寇」と呼ばれる越境的な海賊・商人集団とが、経済的利害や治安などの問題を共有しながら相互に協力関係にあったことを解明し、中国社会と東アジア海域世界との接点をなす社会構造の一端を示すことができた。さらに詳細を小項目に分け、以下に記す。

① 王直と胡宗憲

嘉靖倭寇の頭目とされる王直は、官軍によって日本に追われる 1553 年以前に、寧波府や按察司などの現地当局と協力関係を築き、かたぎの商人、また官軍の下請けとして公然と活動していたことが知られている。本研究では、この事実を敷衍しつつ、その後の王直の事蹟と背景事情を考察した。その結果、胡宗憲が日本国王招諭のために王直を利用し、また王直の一党が官軍の戦力の一端を担って「倭寇」の掃討に貢献していたことを確認できた。また、これらの施策は総督軍務の職権のもと、中央の承認を受けながら周到に準備されながら、最終段階で覆されることにな

る一連の経緯も跡づけることができた。これらの事実から、「倭寇」の平定という形勢を導くために地方官軍がとりえた施策は、局外者には無節操と映るほど極度に柔軟なものである一方、中央の命令もまた政策的一貫性、法的安定性を一顧だにせず、既存の方針を全否定して打ち出される場合があることが判明した。こうした事実は、総督の権限のもと、国制上の常理から逸脱して形成された特権的中間層を、皇帝権が武断的に排除したものと理解できる。以上の論点は、従来胡宗憲の互市構想の失敗と理解されてきた王直の招撫に、法規範と倫理・権力をめぐる法文化論的な意義を与える画期的なものであると自負する。以上の成果は論文①として発表した。

② 徐海と胡宗憲。

倭寇の頭目の一人である徐海は、1556 の江南の戦役で、胡宗憲麾下の官軍の包囲下に最期を遂げる。しかし、徐海はそれに先だって胡宗憲の招撫について官軍に内通し、同じく「倭寇」の頭目であった陳東・葉明らの部隊の鎮圧に協力していた。胡宗憲は自身の徽州人脈やもと王直配下の通番者の仲介によって徐海と接触し、徐海の一党を官軍に取り立てる約束をしてその心服を勝ち取った。ところが「倭寇」のうち日本からの渡来者がほぼ殲滅されても、諸官の反対もあって追い詰められた徐海の集団は半ば自壊に近い形で全滅する。胡宗憲が敵対勢力から内通者を引き出しながら同士討ちを導く戦法をとったのも、「倭寇」を構成する勢力が中国国内における反乱勢力であったことに起因しており、その鎮圧には実際の武力衝突よりも政治的な駆け引きが作用するところが大きかった。成果の一端を図書①③に発表した。

③ 嘉靖倭寇と閩南海寇

嘉靖期の「倭寇」は、胡宗憲によって江南・浙江から駆逐されると、その活動の場を福建南部・広東東部の沿海地域に移す。本研究では漳州における海外出航許可と現地一帯の軍事機構の関わりを探り、一定の史料的根拠を得た。関連する成果の一端を学会発表⑥⑮で発表した。

(2) 漁業・漁民史との関係

中国史における漁業・漁民史の意義について口頭報告をまとめ、学会発表⑯で発表した。

(3) 江南の社会変動との関係

京都大学東南アジア研究センター所蔵の旧日本軍作成地形図を調査し、嘉靖期倭寇の江南における活動拠点が、運河で結ばれた市鎮にあり、現地の商業勢力と密接な関係があることが確認できた。関連する成果の一端を図書①③に発表した。

(4) その他の成果

① 豊臣秀吉の朝鮮出兵について

豊臣秀吉の海外派兵が、中国・朝鮮・琉球においていかに受け取られ、いかなる反応を引き起こしたかについては、これまでは主に日本史研究者が議論を積み重ねてきた。本研究では東洋史の立場から関連文献を再検証し、当時の明の朝鮮観について、新たな側面を見いだすことができた。成果の一端は学会発表⑦⑨⑩で発表した。

② 「抗倭図巻」について

前年来、東大史料編纂所とともに進めていた中国国家博物館所蔵の「抗倭図巻」の研究をまとめることができた。史料編纂所の共同研究の一環ではあるが、本研究の蓄積があっての研究成果である。特に、一説によれば「抗倭図巻」の舞台とされる沈家荘について、『清渓沈氏家乗』に具体的な記述を見いだすことができた。関連する成果の一端を図書①③に発表した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1 件）

① 山崎岳,「舶主王直功罪考―胡宗憲の日本招諭を中心に」,『東方学報』, 査読有, 90号, 2015, 91-143.
http://dx.doi.org/10.14989/204493

〔学会発表〕（計　16 件）

① 山崎岳,「乍浦・沈荘の役再考―中国国家博物館所蔵『抗倭図巻』の虚実にせまる」,「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」, 2013/4/2, 東京大学史料編纂所（東京）.

② YAMAZAKI Takeshi, “The Revival of Malacca?：Malacca and Folangji in the Chinese Perspective”, International Convention of Asia Scholars (ICAS), 2013/6/25, Macau (China).

③ 山崎岳,「朱紈和林希元：明朝中期有關海洋政策施行的法制觀念之衝突」, 東亞海洋史研討會：「亞洲國際通商秩序和中國商人」, 2013/12/25, 厦門（中国）.

④ 山崎岳,「著書『嘉靖倭寇の研究』（仮題）構想発表」, 本科研主催研究会（文科省科研基盤 A「グローバル化時代のアジア・ネットワーク地域社会変容：ジャワ海港都市を事例として」（代表：籠谷直人）と共催）, 2014/5/31, 京都大学人文科学研究所（京都）.

⑤ 山崎岳,「書評：檀上寛著『海禁＝朝貢システムと華夷秩序』」, 日本史研究会中世史部会, 2014/6/28, 社団法人京都宣伝センター機関紙会館（京都）.

⑥ 山崎岳,「海寇是怎樣平定的？：嘉隆萬時期東南海盜的招撫與剿滅」, 中央研究院國際學術研討會「大航海時代的臺灣與東亞」, 2014/7/15, 台北（台湾）.

⑦ 山崎岳,「壬辰戦争期における明朝水軍」（日本語報告）, ブリティッシュコロンビア大学国際ワークショップ「朝鮮の戦争に巻き込まれた明」, 2014/8/26, ヴァンクーヴァー（カナダ）.

⑧ 山崎岳,「攜古詩書坑焚前 聖賢道化可無疑—日本貢使策彥周良的留華經驗—」, 2014 中央研究院海洋史國際學術研討會：亞洲海域間的信息傳遞與相互認識, 2014/9/18, 台北（台湾）.
⑨ 山崎岳,「万暦の倭寇と朝鮮の嚮導—明から見た文禄慶長の役」, 研究班「東アジア近世の地域をつなぐ関係と媒介者」, 2015/3/9, 京都大学人文科学研究所（京都）.
⑩ 山崎岳,「豐臣秀吉在東亞：萬曆壬辰、丁酉大戰的宏觀認識」, 成功大学招待講演, 2015/3/27, 台南（台湾）.
⑪ 山崎岳,「明代中國跨海國際關係」, 清華大学招待講演, 2015/4/1, 新竹（台湾）.
⑫ 山崎岳,「舶主王直功罪考（後篇）」, 研究班「東アジア近世の地域をつなぐ関係と媒介者」, 2015/6/23, 京都大学人文科学研究所（京都）.
⑬ 山崎岳,「バスク人と福建人—比較研究の試み—」, 公開国際文化フォーラム「ザビエルと日本」, 2015/711, 名古屋学院大学（名古屋）.
⑭ 山崎岳,「倭寇與華僧：明代日本人如何看待中國佛教」, 香港中文大學國際學術研討會「人間佛教在東亞與東南亞的開展」, 2015/11/15, 香港（中国）.
⑮ 山崎岳,「明代後期閩南における海港と海寇」, 研究班「転換期中国における社会経済制度」, 2016/2/12, 京都大学人文科学研究所（京都）.
⑯ YAMAZAKI Takeshi, “Between fishing and trading : An essay on the fishermen and maritime commerce in China around the sixteenth century”, Association for Asian Studies (AAS), 2016/4/1, Seattle (USA).

〔図書〕（計　3 件）
① 東京大学史料編纂所編、吉川弘文館、描かれた倭寇、2014、84-95、102
② 村井章介監修、勉誠出版、日明関係史研究入門、2015、166-170、307-317
③ 須田牧子編、勉誠出版、「倭寇図巻」「抗倭図巻」をよむ、2016、309-368

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
山崎　岳（YAMAZAKI Takeshi）
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：60378883
(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし